

越するものと卑しまれるものとの差がなんと印象的に浮かび上がってくることだろう。

保健行政は、根本的に差別行政である。勤労市民の利益を考えないで、われわれの生活を根本的に破壊しようとすることばかりやっている差別行政である。こういう仕事のやり方にならされている一人の環境衛生指導員が差別問題を起こすのは当然であろう。

ハ、水道行政

部落には水道が少ない。まず第一に水道の本管が部落をよけて通っているからである。本管が地区にないのだから、給水のしようがない。初めから部落を除外して本管の施設を計画した差別性そのものが究明される必要がある。この地域では自費で水道をひこうとしてもひけない。

また本管が通っていても水道がひけない場合がある。本管から引きこんで代用管をこしらえてくれれば、共用栓で何十軒もの家庭で水道が利用できるに、それは、私道だからというので放っておかれる。個人負担で給水管がひけるなら

ば、何も部落民は苦勞しない。衛生の根本改善を考えるなら、市民が住んでいる地域に対しては、部落に限らず、配水代用管は、市の責任で当然施設する必要があるだろう。

下水道も同じである。市の下水計画は戦争によって頓挫しているという。市は一九五〇（昭和二五）年、二千万円の子算で下水道の建設計画を復活させた。しかし一九五〇年度の計画では、宮川町から祇園にかけての歓楽地帯が施工地となっている。ところでわれわれの場合どうか。これも上水道と同じ条件にある。本管からの引き込み管は私設下水道としての個人の負担になる。大金持ちならとにかく、長屋の二〇軒も三〇軒もならんで自然に出来上がった私道を、私設水道だというのはっておかれるから、溝と道との区別がつかない、汚水が井戸にしみこむ街が出来上がる。市の負担で下水道が出来る政策が実現するならば、溝や側溝は地下にもぐるから、衛生状態ははるかに良くなる。しかし祇園付近の大歓楽地帯の下水工事の着工は聞くが、これら勤労市民にたいする下水工事が市の手でなされたということは聞か

い。こうして部落や、勤労者の街は、水道からも下水からも見離されて、ますます不潔で見苦しい街となる。

ニ、住宅行政

京都市内には五条通、御池通、堀川通その他の疎開道路が縦横に切り開かれている。戦争中の政策であったが、これらの強制立ち退きを余儀なくされ、自分の土地、自分の家を失った市民に対しては、ようやく敗戦後六年経って初めて、疎開地の買収計画がたったという話である。実に市民を馬鹿にしている。

戦前、部落を改善するためには、道路をつけたり住宅を建てたりする方法が一番良いというので、地区改善だの不良住宅改善だの事業が行われ、道路をとおし、家を立て替えるために、住んでいる家をずいぶん壊されたことがある。しかし、戦争がたけなわになって、計画倒れになり、家は壊されようだいになってしまった。敗戦後六年、いまだにそのための住宅建設の予算が市会を通ったという事実を知らない。自分で家を建てようとしても、土地は涙金で没収されたり

で、替え地も与えてくれない。錦林では土地を売った金がまだ支払われていないところさえある。

時々ブロック住宅だの鉄筋住宅が建てられるようだが、それには月収一万五千円という制限があってお話にならない。不良住宅改良のために取り払われたり、疎開させられたりした場所は、今ではゴミすて場所になっている。「塵埃の山で埋まり」「裸体に近い風俗ではなつたれ子たち」の「遊びたわむれている」場所を、こうして、市は、不良住宅をなくすという名目で、かえってつくりあげてしまったのである。追いつめられた住民は一体どこにいつているのか。東七条の地帯には、旅館、木賃宿が非常に多い。宿やとはいいながら、ほとんど常住している。小さな汚い部屋で、権利金は別で、月に千円も二千円もする。間借り制度として固定してしまっている。市の住宅政策の貧困のもたらす結果である。

公共住宅が無策に放っておかれる一方、市の公共施設はどしどし建設されている。上京警察署は新設され、中京、伏見消防署も、また伏見区役所も改築される。しかも勤労市民

は、住むに家なく、たまたま建てられる公営住宅は無資格で
ふりおとされ、不良住宅建設で追い出された部落の住民は、
高い間借り生活に追い落とされていくというのが、今日の市
当局の住宅政策であらう。

ホ、経済政策

もともとひどい部落の大衆の貧乏は、朝鮮動乱から急角度
に深刻になった。日本産業の軍事化の反面、平和産業はぞく
ぞく倒れている。特需関係の資本家の戦争成り金的大もうけ
のかたわら、皮革、履物修繕、鹿の子ほり、土木建設、自
由労働者やリントクなど——部落民は主業として、または副
業としてそれにしぼりつけられている——は、その資本が零
細なために、平和産業の不況に耐える力がない。その上法外
な重税をしばられて、没落はますます早くなりつつある。し
かも部落民であるが故に、転業転職の途はまったくふさがれ
ている。かくて部落の産業は、破滅のふちに追こまれてい
る。苛酷な市の重税に迫いたてられて、絶望のあまり自殺の
道をたどった部落の業者もある。

これらの部落産業に対して、果たして、市は適切な措置を
とっているだろうか。市政の第一目にあたって中小企業相
談所を開設し、金融その他の指導にあたっているが、部落の
産業は、部落の産業である故に、担保その他の条件で、より
劣悪であり、その故に何らの保護もとられず、倒れてゆく平
和産業の最初の犠牲となっていはしないだろうか。

これらの事情は部落農民の場合も同様である。彼らの生計
を支える伝統的な兼業、副業収入は、都市部落民の盛業が失
われるのと同様に急速に失われつつある。地主保有の上等地
と同等の強制供出、低米価による収奪に加えて、税金の重荷
は部落農民の急速な没落を余儀なくせしめる。部落大衆の経
済生活における深刻な破壊が、直ちに差別的な助長と
なってあらわれてくるのである。

ヘ、教育政策

部落の子供が学校教育から受けている差別はどおそろしい
ものはないであらう。通学区域を部落で限られている学校で
は、学校全体が差別せられる。通学区域を交えている学校で

は、学校の内部で差別せられている。あるいは教室の中で差別せられている。通学区の編成の際におこるトラブルは、すべてこれらの差別が、現実実感として存在することを証明している。学校自体が差別せられているから、教師たちはこれらの学校に赴任することをよろこばない。

学校教育の差別はそれだけではない。不就学児童の問題がある。日本の教育制度では、小、中学校の教育が義務教育であるということはいうまでもない。就学させる義務を市の教育委員会は負わされていることになる。しかし、市は、実際にこれらの義務を果たすことに誠意をみせたか。高野中学校の不就学児童の八〇％は養正の地区の児童である。これに対して、市や学校から具体的な手がうたれたということを聞かない。むしろ、部落の要求に対して、無関心でさえある。もちろん比較的誠意をもってやっている学校もある。不就学児童に対する対策が、校長の主観で行われていることは、むしろ、市教委の部落に対する無関心、したがって根幹的には差別教育のありのままの姿を露出してみせているということが

できる。これがとくに「窓ガラスのない教室をなくする」とをスローガンに打ち出した高山市政の教育政策の実態である。おそらく、京都市の差別教育は、明治年間に、若き日の島崎藤村の正義心をあおりたてた信州飯山の差別教育とたいした隔たりのないものであろうことは疑えない。こうした教育制度の下で成長した人間が長じて、市の保健所に務め、再び差別を社会的に打ち出すということも、決して不思議ではない。

ト、集約的に

部落にたいする行政はすべて差別行政でもって一貫している。既に見てきたように、住宅、街路、下水、上水は勿論、すべての衛生施設は差別的に荒廃のままですておかれ、職業にたいするなんらの保障もなく、文盲の再生産にたいしてもなんらの防過手段もとられていない。

しかも高山市長はすでに指てきたように外国人や天皇崇拜の仕事ばかり行っている。彼の外国旅行からの唯一の土産は、五千人の外国人を入れるという『国際観光文化会館』の

建設であつた。彼の思惑で外国人がこの会館を利用することによつて外国に宣伝しようとする意図であることは間違いない。

その半面、部落の生活は、これらの悪条件のもとに、一層苦しくなり破滅に瀕している。失業者、半失業者は日に日に多くなつてゐる。今ではいわゆる「かつぎ屋」ですらなりたたなくなつた。履物修理、靴みがきその他いろいろな露店商もいたるところでひじひじ追い立てられてゐる。そのうえに特需インフレは日常生活物資の値段を跳上がらせた。京都市では、市電が八円から一〇円に、市バスは一〇円から一五円になるといふ、また水道料金も五〇円から六五円に三割ねあがりするといふ。水栓が一つしかない、もつとも大衆的な家庭だけが三割で、その他は僅か一割程度だといふことである。正に勤労市民いじめの大衆課税だ。しかも市税は一文もへらない。部落の失業者はますます増えていく。

部落の失業者の唯一の生活手段である自由労働者の就業日数はいよいよよ少なくなつた。スローガンに失業対策を打ち出

し、勤労市民の支持を得て公選された高山市長は、もはや失業対策を授けてしまい、公然と自由労働者をモップだと称して敵に回そうとしている。円山事件にもちろん、現場に、特高上りの査察班をいれるなど、その警察政策は堂にいっている。自己の政策の貧困がもたらした結果であることを意識せず、すべて自由労働者が暴力化したとテマつてゐる。その自由労働者は月半分働けないのである。だ婦人労働者に至つては、失業保健の資格が取れる条件さえみたされないのである。

高山市政はここにいたつて、その一切の差別行政をつうじて、計画的に勤労市民を分裂させようとしているばかりでなく、更にモップとして、部落民を警察力のじゅうりんするところに任せようとしている。

これらのやりかたは高山市政がついに、日本の植民地化、戦争基地化、ファッシヨ化を支持し、差別と貧乏をますます激化させることによつて、いよいよ強く外国人の優越性、外国に従属する再軍備植民地化の宣伝せん動をおこない、真に

平和と独立と民主主義のために闘うものには、あらゆるデマと悪罵をもつともはげしく投げ付けていることの証明以外の何もでもない。

部落の発展的解消のためにとるべき政策

「オールロマンス」の差別事件はかくして、それ自体の問題として止ることはできない。「オールロマンス」に掲載された小説「特殊部落」の作者一人が処断されて、それで済む問題ではない。むしろ彼は、差別市政の一人の犠牲者に過ぎない、作者の責任が追及される前にまず九条保健所の責任が追及されねばならない。そのことは同時に市の衛生行政が、その差別性ゆえに追及されることを意味する、衛生行政の責任が追及される日は、即ち土木、水道その他一切の市政における差別性とその責任を追及される日でなければならぬかくして高山市長そのものが問題となる。高山市長はただちに次のことを行われねばならない。

昭和二五年二月八日、高山市長を支持したすべての市民を円山公園にあつめ、日本の支配者反動勢力と一切の手をきることを宣言しなければならぬ。外国人の手先となることをやめ、売国奴吉田の徒弟となることをやめる宣言をしなければならぬ。

高山市政が、戦争に反対し、戦争政策を支持せず外国にこびへつらうすべての政策をすて、平和を守り、平和産業を發展させるための施策を無限におこない。すべての人間の自由と政策を確保し、市民に豊かな生活への道を指し示すとき、はじめて封建の野ばんと、文明の悲惨とあわせて、なかば社会外におかれている部落民は解放され、平等の人権と、自由と平和の生活を確保する大道にすすむことができるのである。

われわれの要求はこうだ

戦争反対、平和を守れの声は、全世界をおおい、日本人民

は植民地化、軍事基地化に反対して、平和と独立への全面講和のために闘っている。

われわれは部落解放の日まで全部落民を結集し、その闘争力をもって平和と独立をかちとるであろう。

われわれは部落を解放し、根絶せしめるために、京都市長に対して当面次の施策をとることを要求する。

* * 高山市政から差別をなくせ

* 土 木 行 政

1. 道路下水の改修、すべての下水に側溝をつけろ

2. 疎開あとの整理と児童公園の設置

* 保 健 衛 生 行 政

1. オーレオマイシンによるトラホーム集団治療の即時実

施

2. 結核予防のために、集団検診と患者の即時入院など特

別の処置をとれ

3. 部落に保健所の分室をつくれ

4. 共同便所の設置と塵芥、肥尿の撤去回数をややせ
5. 錦林、三条の共同便所を即時改装改築せよ

* 民 生 行 政

1. 隣保館運営化の増額と事業の拡充

2. 生活保護法を完全に実施せよ

3. 働く婦人のために育児所をつくれ

4. 失業対策のワクを増やして完全就労させよ

5. 不良住宅の改善と勤労者住宅の設置

6. 隣保館、共同浴場の修繕ならびに改装せよ

* 教 育 行 政

1. 不就学児童をなくする政策をすぐたてよ

2. 不就学児童のために部落に夜間学校をつくれ

3. 児童のために無料にして完全なる給食を実施せよ

4. 生活困窮家庭の児童に一切の学用品を無料で支給せよ

* 水 道 行 政

1. 下水計画を市民的立場からたてなおせ

2. 共同水道を市の全額負担で通せ

* 経 済 行 政

1. 部落の中小企業に対する指導と補助金の貸与

2. 皮革産業を指導育成せよ

3. 金融対策の重点的考慮をはかれ

* その他一切の行政機関は右にならって、市民的立場から
施策をたてなおせ